

原著

2歳児相談における事前問診の語彙チェックリスト作成の試み - 文法カテゴリーによる分析：名詞 -

苅田 知則¹⁾, 笠井新一郎¹⁾, 岩本 さき²⁾, 長嶋比奈美¹⁾, 稲田 勤¹⁾,
塩見 将志³⁾, 間野 幸代¹⁾, 石川 裕治¹⁾, 山田 弘幸⁴⁾

Production of a vocabulary checklist for inquiry prior to
counseling for children aged 2 years

- A Structure and Increase of Nominals -

Tomonori Karita¹⁾, Shinichiro Kasai¹⁾, Saki Iwamoto²⁾, Hinami Nagashima¹⁾, Tsutomu Inada¹⁾,
Masashi Shiomi³⁾, Sachiyo Mano¹⁾, Yuji Ishikawa¹⁾, Hiroyuki Yamada⁴⁾

要 旨

著者らは、1歳6ヶ月児健診で気にかかった子どもを改めて経過観察として、香川県坂出市において、2歳児を対象として発達相談（以下、2歳児相談）を試験的に行っている。2歳児を対象とした相談事業や経過観察を行うことによって、何らかの言語発達障害を有する子どもや「気になる子」を早期発見・早期治療することが可能となるが、評価時間の短さや、子どもの語彙発達を評価する指標がない点が問題として挙げられた。そこで、2歳児の語彙発達の現状を明らかにし、2歳児相談時にスクリーニングとして使用できる語彙チェックリストを作成する、ことを目的とし、調査研究を行った。調査の対象者は、香川県坂出市内の全保育所(12施設)に所属する1歳11ヶ月から2歳11ヶ月の子どもの保護者であり、161名であった。調査においては、名詞・代名詞・抽象語・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・感動詞を含む、全語彙数452個のチェックリストを、調査用紙として用いた。本稿では、名詞に焦点を当て、Nelson(1973)の文法カテゴリーを用いて分析を加えた。その結果、以下の三点が示唆されるとともに、これらの点は、特に2歳児相談において注意すべきポイントとして考察された。

- (1) 2歳0ヶ月児の60%が表出していると回答があった項目は86語であり、2歳6ヶ月児の場合は137語であった。
- (2) 2歳児相談としてチェックすべき名詞の数は90±10語程度である。
- (3) 「事物」と「抽象」に分類される語が2歳0ヶ月から2歳6ヶ月の間で大きく変化する。

キーワード：2歳児，語彙チェックリスト，名詞

1) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科

Department of Speech, Language and Hearing Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

2) 回生病院 リハビリテーション科 言語療法室

Department of Rehabilitation, Kaisei Hospital

3) もみのき病院 リハビリテーション科

Department of Rehabilitation, Mominoki Hospital

4) 九州保健福祉大学 保険科学部 言語聴覚療法学科

Language Hearing Treatment Subject of Study, Department of Health and Science, Kyushu University of Health and Welfare

Abstract

The authors participate the “counseling service of infants aged 24 months” in Sakaide, Kagawa prefecture, and follow up the speech and language development of them who were detected some developmental problems in health examination for children aged 18 months. However, we have no parameters in Japanese to evaluate the speech and language development of infants in 24 months. Therefore, we needed to produce a checklist to be used for screening in counseling. This present study is one of analyses of a trial survey to produce the vocabulary checklist, and focuses on a structure and increase of nominals according to classification of Nelson (1973). The purpose of this questionnaire survey is to research the quantity and qualitative structure of vocabulary of infants between 23 and 35 months, and 161 parents participated in this research, whose children belonged to 12 nursery schools in Sakaide. The results of the survey show as follows. And we discussed the necessity to pay attention to “evaluate” children’s speech and language development in these three points.

1. Eighty-six nominals were expressed by 60% of children aged 24 months and 137 nominals by one aged 30 months.
2. The normal ranges of nominals in 24 months were between 80 and 100 words.
3. There were marked changes in words classified as “Objects” and “abstractions” in “general nominals (Nelson, 1973)” between the age of 24 and 30 months.

Key words: infants at 24 months, vocabulary checklist questionnaire, nominal

1. 2 歳児相談の背景

2 歳は、1 歳 6 ヶ月児健診では人見知りで言語発達の度合いを把握できなかった子どもも、落ち着きを見せる時期である。また、一般的に、健常な 2 歳児は 200～300 語程度の発語がみられることが指摘されているように、表出語彙も安定してくる時期でもある。

笠井ら¹⁾は、1 歳 6 ヶ月児健診で気にかかった子どもを改めて経過観察することの重要性を指摘し、香川県坂出市において、2 歳児を対象として発達相談（以下、2 歳児相談とする）を試験的に行っている。この 2 歳児相談は、2 歳児の聴覚・言語発達の検診、1 歳 6 ヶ月児健診で未通過だった子どもの、その後の発達状況のチェック、聴覚、言語発達、行動面のチェックによる、軽度～中等度聴覚障害、軽度発達障害、高機能自閉症などのスクリーニング、検診後のフォローシステムの整備、を目的として保健婦と言語聴覚士（以下、ST）によって実施されている。

こうした 2 歳児を対象とした相談事業や経過観察

を行うことによって、何らかの言語発達障害を有する子どもや「気になる子」を早期発見・早期治療することが可能となるが、実施に際していくつかの解決すべき問題があった。その中で最も大きな問題が、評価時間の問題である。1 回の相談において、物理的に一人の子どもに割くことのできる時間は 3～5 分程度であった。言語理解面に関しては、積木課題や呼称課題・絵指示課題を用いれば、短時間の面接評価でスクリーニング可能であるが、言語表出面に関しては、時間が短く正確な語彙発達の程度を評価することが難しい。

その解決策として、事前に保護者から、対象児のおおまかな語彙数を尋ねる問診も試行してみたが、把握する保護者も日常生活において子どもがどの程度語彙を表出しているか、正確な語彙数を理解しているわけではなく²⁾、評価の参考とするにしても情報が少なすぎた。

そこで、「2 歳児相談」の案内を送付する際に、日常生活における語彙チェックリストを同封し、相談に訪れるまでの間に、対象児が発する語彙に印をつ

けてもらうことで、使用語彙数を把握する資料とする方法を考えた。さらに、このようなチェックリストを配付することで、保護者も、対象児の表出語彙に対してより注意を向けるようになり、子どもに対する注意・関心が喚起されるという臨床の効果も期待された。

2. 語彙チェックリスト作成における問題と目的

ここで、まず問題となってくるのが、語彙チェックリストとしてどのようなものを用いるか、ということである。このような質問紙法を用いた発達検査として、遠城寺式発達検査や津守式乳幼児発達検査などがあり、言語面に関する項目も含まれている。しかし、どちらかというとな全体的な発達を評価することを目的としており、表出語彙に関する項目数は少ない。

また、現時点では、日本においては大久保³⁾や高橋⁴⁾などが語彙使用に関する縦断的研究を行っているが、現代日本の社会事情にそくした2歳児の語彙発達を明確にした体系的かつ横断的研究はほとんど見あたらない。

したがって、上述の目的にあわせて、2歳児の語彙発達を抽出するチェックリストを作成する必要性が生じた。ゆえに、著者らの最終的な研究目的は、2歳児相談における、何らかの言語発達障害を有する子どもや「気になる子」を早期発見・早期治療する手がかりとなるチェックリストを作成することにある。

その上で、本稿を含む本紀要に掲載した一連の研究では、語彙チェックリストを作成する第1段階として、2歳児の表出語彙の実態を把握するために、香川県坂出市の保育所に在籍する1歳11ヶ月から2歳11ヶ月の子どもを対象として、それぞれの保護者に質問紙調査を行った。ここでは、その調査研究から得られた結果をふまえて、チェックリストとして用意する語彙の範疇や種類について、全体的な表出語彙数と文法カテゴリーを基準とした検討を加えた。

3. 品詞カテゴリーに関する先行研究の知見と議論

文法カテゴリーを基準とした場合、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・感動詞など様々なカテゴリーがあるが、その中で、子どもの言語発達において最も重要視されるのが名詞である。

近年の語彙獲得研究の徴候として、初期の言語発達において、物の名前を表す名詞が多く含まれるのか、それとも活動や状態、関係を示す動詞が多く含まれるのか、という点に注意が向けられている。これはGentner⁴⁾が行った研究に端を発するが、Gentnerは、英語・ドイツ語・日本語・カルリ語・標準中国語・トルコ語を話す6カ国の子どもの言語発達を、テープの再生や語彙リストの記録などを用いて検討しており、その中で初期の子どもの語彙においては、言語に関係なく、普遍的に名詞が優位であることを指摘している。そして、その理由として、名詞は事物の指示物を視覚的に利用できるなど、子どもが名詞を学習しやすくしている知覚的・認知的過程が基盤に存在すると述べている。

また、Ogura⁵⁾は、同じく比較文化的な語彙に関する調査研究から、日本語獲得児は、英語圏の子ども同様、動詞よりも名詞の方が先に多く獲得されていく事実を上げ、「名詞では、事物の指示物を視覚的に利用でき、容易に獲得できる」というGentnerの仮説をもとに、日本語文化の語彙発達における名詞の優位性を指摘した。

さらに、Nelson⁶⁾も、語彙発達のごく初期では、事物や物の名前に関する語彙が増加しており、命名学習の効果として名詞が動詞より多く増加することを示している。

Gentner⁴⁾の研究に関してはその後様々な批判がなされ、子どもの語彙発達において、名詞・動詞のどちらが優位に獲得されていくかという問題に関しては、まだまだ議論の途上ではある。しかし、上記の研究からも、名詞のごく初期の語彙発達において非常に重要な役割を果たしていると言えるだろう。

4. 本研究の目的

前述の背景をもとに本研究では、文法カテゴリー

のうち名詞に焦点を当て、2 歳児の名詞獲得の実態を把握するとともに、2 歳児相談で用いる語彙チェックリストに含みこむ名詞の量と範疇について検討を加えることを目的とした。

5. 方法

(調査協力者) 香川県坂出市内の全保育所(12施設)に所属する1歳11ヶ月から2歳11ヶ月の子どもの保護者, 161名。

(調査時期) 2000年3月初旬。

(チェックリストの作成) 調査で用いたチェックリストの項目は、大久保²⁾が作成した2歳児の語彙リストと、三省堂『こどもことば絵じてん』⁷⁾を参考に作成した。チェックリストに含まれる全語彙数は、452個で、品詞としては、名詞・代名詞・抽象語・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・感動詞などを導入した。

(チェックリストの回収率) 公的機関である保健センターからの依頼という形を取ったため、調査用紙の回収率は100%であった。

6. 結果

2 歳児相談で問題になるのは、対象となる 2 歳 0 ヶ月児の語彙発達として、どの程度を正常値としてスクリーニングの基準とするか、という点である。この基準が厳格すぎれば経過観察としてとりこみすぎになり、緩やかすぎれば障害の見逃しにつながる。通常、標準化を目指した検査では、統計処理を用いて標準偏差や評価点から有意に精神発達遅滞が疑われる値を算出する方法が用いられる。しかし、調査協力者の人数や語彙チェックリストによる問診という方法を考えると、厳密な境界値を出すことは、現時点では早計であると判断した。したがって、本稿では分析に際し、あえて統計処理は行わず、津守式乳幼児精神発達検査や遠城寺式乳幼児発達検査の指標⁹⁾、¹⁰⁾に習い、2 歳 0 ヶ月 + 6 ヶ月を正常値の幅として想定した。

そこで、まず 2 歳 0 ヶ月児と 2 歳 6 ヶ月児を対象として、それぞれの段階で 60% 以上の子どもが表出

していると回答された項目について表を作成した。これは、他の多くの発達検査でも各項目の合格基準を該当月齢児の 60% 以上が合格することとしていることから、スクリーニングの手段として用いる語彙チェックリストの項目を検討する指標として採用した。

表 1 に示したものが、2 歳 0 ヶ月児の 60% 以上が表出していると回答があった項目(以下、通過した語とする)であり、86 語であった。

次に、表 2 に示したものが、2 歳 6 ヶ月児の 60% 以上が通過した名詞であり、全部で 137 語あった。なお、下線の文字で示しているのが、2 歳 0 ヶ月児では通過となっておらず、2 歳 6 ヶ月児で通過となった語である。

上記のように、2 歳 0 ヶ月児と 2 歳 6 ヶ月児を比較した場合、2 歳 6 ヶ月児の方が表出されていると回答された語(通過した語)が多いのは当然であるが、ここで議論すべき点として、6 ヶ月の生活年齢の違いによって、名詞の表出にどのような質的相違が見られるか、という問題が挙げられる。

そこで、名詞にふくまれる語が加齢に伴い内容がどのように変化していくのかを探索的に理解するために、名詞に含まれた語彙を Nelson⁶⁾の知見に基づき、分類しなおした。Nelson は、名詞を大きく一般名詞類と特殊名詞類の二つに分類している。そのうち、特殊名詞類とは、母親に対する「ママ(Mommy)」といった「呼びかけ、友達やペットの名前など、1 例のみを表すための語」を指すが、今回のチェックリストでは、このような特殊名詞類は含めていなかったため、分析から除外した。

次に、一般名詞類は、「子どもと大人のどちらが定義したにしろ、カテゴリーのすべてのメンバーを指し示すために使われる語」であり、物体(Objects)・物質(Substances)・動物と人間(Animals and people)・抽象(Abstractions)・文字と数(Letters and numbers)・代名詞(Pronouns)が含まれる。このうち、文字と数・代名詞に関しては、今回の調査で用いたチェックリストにおいては、抽象語・代名詞で用いた語が該当するため、本稿では取りあげな

表1 2歳0ヶ月児の60%以上が通過した語

いし	こおり	ひ(火)	いぬ	うさぎ	うし
おに	おばけ	かえる	かに	かば	かめ
きりん	くま	さかな	さる	ぞう	ちょうちょ
ねこ	むし	はな(花)	あたま	かお	かみ
くち	けが	ち	て	おてて	はだか
はな(鼻)	ほほ	みみ	ゆび	いちご	かし(お菓子)
ぎゅうにゅう	くすり	けーき	ごはん	じゅーす	せんべい
たまご	ちょこれーと	にく	まめ	かさ	かばん
ずぼん	ぼうし	めがね	さじ	たおる	てれび
でんわ	はし	ふとん	にかい	といれ	ごみ
あかちゃん	おかあさん	おとうさん	おじいさん	おばあさん	にいさん
おかわり	さんぼ	しごと	だっこ	たっち	おはよう
ごめん	がっこう	えほん	おもちゃ	ふうせん	ぶらんこ
ぼーる	きしゃ	ぶーぶー	ばす	ひこうき	ふね
えんぴつ	しゃしん				

計86語

表2 2歳6ヶ月児の60%以上が通過した語

いし	こおり	ひ(火)	いぬ	うさぎ	うし
おばけ	かえる	かに	かば	かめ	きりん
きんぎょ	くま	さかな	さる	すずめ	ぞう
ちょうちょ	ねこ	むし	ちゅーりっぷ	はな(花)	あたま
かお	かぜ	かた(肩)	かみ(髪)	くち	けが
て	おてて	なみだ	はだか	はな(鼻)	ほほ
みみ	ゆび	いちご	おかず	かし(お菓子)	ぎゅうにゅう
くすり	けーき	ごはん	じゅーす	せんべい	だいこん
たまご	ちょこれーと	にく	まめ	えぷろん	かさ
かばん	ずぼん	すりっぱ	ぼうし	ほけっと	めがね
おかね	さじ	さら	たおる	てれび	でんわ
とけい	ばけつ	ひも	ふとん	まくら	げんかん
にかい	といれ	ごみ	あかちゃん	いしゃ	おかあさん
おとうさん	おじいさん	おばあさん	おじさん	おばさん	きやく(客)
さんたくろーす	こども	ともだち	にいさん	ねえさん	おかわり
けんか	さんぼ	しごと	せんたく	そうじ	だっこ
たっち	まつり	むかえ	やすみ	ようじ(用事)	おはよう
ごめん	こんにちは	さようなら	いらっしゃい	がっこう	とんねる
じゃんけん	えほん	おもちゃ	たこ	つみき	にんぎょう
ふうせん	ぶらんこ	ぼーる	きしゃ	さんりんしゃ	じてんしゃ
じどうしゃ	ぶーぶー	でんしゃ	とらっく	ばす	ひこうき
ふね	うた	え	えんぴつ	おりがみ	かみ
くれよん	しゃしん	しんぶん	なまえ	ほん	

計137語

(下線は2歳0ヶ月時ですでに60%以上が通過となった名詞)

い。また、今回用いたチェックリストで「名詞」に分類されていた語の中で、物体にあたる語としては、「いちご・あたま・おもちゃ・ぼーる・ひこうき」などが挙げられ、物質としては「いし・こおり・ひ・ぎゅうにゅう」など、動物と人間としては「いぬ・ねこ・おかあさん・おとうさん」など、抽象としては「おに・おばけ・さんぽ・しごと」などが含まれる。なお、今回著者らが用意した語彙項目のうち、「おかわり・だっこ・たち・おはよう・ごめん」に関しては、Nelson が示す名詞類の範疇には含まれず、以下の分析においては除外した。

上述の定義をもとに、2 歳 0 ヶ月児と 2 歳 6 ヶ月児それぞれに数量化してみたところ、表 3 に示すような結果が得られた。これをみると、事物と抽象に分類される語が、2 歳 0 ヶ月児と 2 歳 6 ヶ月児の間で大きく異なっていることが示唆された。つまり、半年の間で、この二つのカテゴリーの名詞が多く獲得されていく可能性が考えられた。

次に、チェックリストからスクリーニングに用いるには不適切な語を除外するために、2 歳 10・11 ヶ月児でも 60% 未満の子どもしか表出していると回答されなかった名詞(以下では通過しない名詞とする)をリストアップしたところ、11 個の名詞が抽出された(表 4 参照)。これらを見ると、「おべべ・げた・きもの・しゃしょう(車掌)」など、現代社会ではほとんど使われなくなった語や、「ねがい・おじぎ」な

ど抽象度の高い語であると考えられた。これらの言葉は、将来的には獲得される語であるが、2 歳児相談において、ごく初期の言語発達をスクリーニングすることを目的としたチェックリストにおいては、除外した方が妥当であろう。

7. 考察

以上の結果より、チェックリストの項目としては、2 歳 0 ヶ月児は 86 個の通過、2 歳 6 ヶ月児は 137 個の通過が見られた。先に本稿における分析の前提として、2 歳児相談において用いる語彙チェックリストを作成することが目的となっており、2 歳 0 ヶ月 + 6 ヶ月を正常な語彙発達の基準として想定したと述べたが、2 歳児相談で来所する子どもが、ほとんど生活年齢 2 歳 0 ヶ月ジャストであるという事実から考えると、チェックリストの中で注意して確認する必要のある名詞の語彙数の目安としては、 90 ± 10 個程度が妥当であろう。その意味で、今回 2 歳 0 ヶ月児で 60% 以上が通過した語彙については、語彙チェックリストだけではなく、相談の時に呼称課題や行動観察において、注意して確認する必要があるだろう。

次に、名詞の中でのカテゴリーが、2 歳 0 ヶ月児から 2 歳 6 ヶ月児でどのように変化するかという点について、表 3 にも示した通り、一般名詞類の事物と抽象の増加率が大きいことがうかがえた。この

表 3 各月齢で通過した名詞のうちわけ

	事物	物質	動物と人間	抽象
2 歳 0 ヶ月	50	5	22	5
2 歳 6 ヶ月	76	7	27	18

表 4 2 歳 10・11 ヶ月児の 60% 未満しか通過しなかった語

おべべ	きもの	げた	にわ
べんじょ	おやこ	やおやさん	おじぎ
ままごと	しゃしょう	ねがい	
計 11 語			

ようなカテゴリーに関しては、2歳児相談後、3歳児健診に向けて経過観察を行う際に注目することで、語彙発達のフォローができるのではないだろうか。

8. まとめ

今回の一連研究の問題点として、調査対象となった子どもはどの月齢とも10名程度であり、サンプル数が少なかった。サンプル数が少ないとはいえ、2歳児相談の現場である香川県坂出市の全保育所に所属している幼児全員を対象としたという点で、本研究における結果についてはある程度の妥当性は確保できているといえるだろうが、実際にスクリーニングの指標として語彙チェックリストを用いることを考えれば、さらにサンプル数を増やして、信頼性の確保や標準化を視野に入れた検討が必要だろう。

もう1点は、内容に関する分析がまだ十分なされていないことである。今回は60%以上の子どもが通過した語をリストアップするという分析方法を用いたが、2歳代の子どもの語彙発達を明確かつ実証的に構造化するならば、クラスター分析や数量化理論などの統計処理を行い、項目間の共通性を抽出するなどの詳細な分析を加えなければならない。したがって、これらの問題点を加味したうえで、今後より体系的な調査を行う必要があるだろう。

引用文献

- 1) 笠井新一郎, 岩本さき, 長嶋比奈美, 稲田 勤, 山田弘幸, 鈴木 啓, 石川裕治, 苅田知則, 間野幸代, 福永一郎, 實成文彦: 「2歳児相談」における聴覚・言語発達検診の試行, 日本公衆衛生雑誌 第59回日本公衆衛生学会総会抄録集, vol. 47, No. 11, p554, 2000.
- 2) 岩本さき, 笠井新一郎, 苅田知則, 長嶋比奈美, 稲田 勤, 塩見将志, 間野幸代, 石川裕治, 山田弘幸: 2歳児相談における事前問診の語彙チェックリスト作成の試み - 1歳11ヶ月から2歳11ヶ月の全使用語彙 -, 学校法人高知学園高知リハビリテーション学院紀要, 第2巻, p23-32.
- 3) 大久保愛: 幼児言語の研究 - 構文と語彙, あゆみ出版, 1984.
- 4) 高橋 巖: 幼児の言語の発達, 東京堂出版, 1967.
- 5) Gentner, D.: Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In S. A. Kuczaj (Ed.), Language development, Vol. 2. Language, thought, and culture. pp.301-334, Hillsdale, NJ: Erlbaum, 1982.
- 6) Ogura, T.: A longitudinal study of relationship between language development and play development. Journal of Child Language, 18, pp.273-294, 1991.
- 7) Nelson, K.: Structure and strategy in learning to talk. Monographs of the society for research in child development, 38, No.149, 1973.
- 8) 金田一春彦監修: 三省堂こどもことば絵じてん, 三省堂, 東京, 1996.
- 9) 津守 真, 稲毛教子: 増補 乳幼児精神発達診断法 0才~3才まで, 大日本図書株式会社, 東京, 1997.
- 10) 遠城寺宗徳, 合屋長英, 黒川 徹, 名和顕子, 南部由美子, 篠原しのぶ, 梁井 昇, 梁井迪子: 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法, 慶應義塾大学出版株式会社, 東京, 1977.